文字・表記（史的研究）

西宮一民

一、はじめに

昭和五十五年・五十六年（まれに五十七年二月までを含む）間における「文字・表記（史的研究）」関係論文として、私が選択したのは計六二篇であった。これは、音韻や語彙の分野に傾いた論文、また純粋に資料的なものの索引的なものを省いた数である。この六二篇の執筆者名・論文名・誌名等を最初に掲げるべきであるが、紙幅が許さない。一覧表を作ると、四百字詰原稿用紙で約七枚分あるとだけ記しておく。ただし、掲載誌（書）名のみ順不同のまま挙げると次の通りである。

馬淵和夫博士退官記念・国語学論集（大修館）、佐藤茂教授退官記念・論集国語学（桜楓社）、土井先生頌寿記念論文刊行会・国語史への道上（三省堂）、鎌倉時代語研究（武蔵野書院）、近代語研究（武蔵野書院）、古事記年報（古事記学会）、訓点語と訓点資料（訓点語学会）、国語学（国語学会）、神道宗教、国語と国文学、国語国文、文学、国文学（学燈社）、解釈と鑑賞（至文堂）、各大学（研究室）刊行学術雑誌等。

二、諸論文の内訳

六二篇の関係論文を展望するとして、それを記事として叙述することを避け、なにがしかの基準を設けて、分類することによって説明的に記すことにする。

㈠時代別分類――上代（一七篇）、中古（二一篇）、中世（一二篇）、近世（六篇）、近代（六篇）

「上代」は奈良時代末宝亀十二年（七八一）まで、「中古」は後鳥羽天皇文治六年（一一九〇）まで、「中世」は慶長五年（一六〇〇）関が原の戦いまで、「近世」は慶応四年（一八六八）まで。「近代」は明治時代。私は、「上代」が多かろうと予想していたが、「中古」のほうが多いことを知った。

㈡文献別分類――古事記（一〇篇、小林芳規1・2・3・4・5・戸谷高明6・夏井邦男7・藤原照等8・小島憲之9・犬飼隆10）、万葉集（三篇、古屋彰11・木下正俊12・丸山隆13）上代文献一般（三篇、岩淵匡14・中村昭15・佐々木隆16）、木簡（一篇、尾崎知光17）〈以上「上代」一三氏〉。日本霊異記（二篇、鈴木恵18・19）、経国集・新撰万葉集（一篇、小島憲之20）、続紀宣命（二篇、小谷博泰21・

北川和秀22）、竹取物語（一篇、曽田文雄23）、古今集（一篇、藤田菖畔と田中実弥子24）、延喜式祝詞（二篇、小谷博泰25・金子善光26）、和名抄（一篇、工藤力男27）、尾張国解文（一篇、三保忠夫28）、御堂関白記（二篇、峰岸明29・佐藤稔30）、小右記（一篇、小山登久31）、明衡往来（一篇、三保忠夫32）、承暦本金光最勝王経音義（一篇、近藤泰弘33）、殿暦（一篇、小山登久34）、古本説話集（一篇、山内洋一郎35）、文書（一篇、村田正英36）、和泉往来（二篇、山田忠雄37遠藤嘉基38）〈以上「中古」二〇氏。共同研究は一氏として数えた〉。定家本土左日記（二篇、望月正道39・安宅克己40）、京大本古今秘注抄（一篇、坂本清恵41）、紫式部日記傍注本（一篇、藤村幸三42）、字鏡集（一篇、峰岸明43）、徒然草（一篇、小松英雄44）、節用集（一篇、安田章45）、玄玖本太平記（一篇、深野浩史46）、大蔵流狂言本（一篇、菅原範夫47）、古活字版伊曽保物語（一篇、菅原範夫48）、その他（二篇、林史典49・外山映次50）〈以上「中世」一二氏〉。雑俳書（一篇、山田俊雄51）、反故集（一篇、古屋彰52）、富士谷成章庚寅辛卯壬辰詠藻（一篇、竹岡正夫53）、浮世風呂（一篇、土屋信一54）、大田南畝向岡閒話（一篇、矢野準55）、海上砲術全書（一篇、松井利彦56）〈以上「近世」六氏〉。鷗外（三篇、山田俊雄57・小島憲之58 59・西野玲子と山田晃60）、その他（二篇、佐藤喜代治61・飛田良文62）〈以上「近代」五氏〉。

右の「文献別分類」での特徴は、「文献別」に分類ができるほど、「文字・表記」の分野では、文献単位の研究がものを言うのだということを表していると考えられる。すなわち、文献を隅から隅まで調査し尽さなければ、その文字、その表記の妙味ないし真意が分らないのである。さてここでも、「中古」の研究人口が多いことを示している。

(ニ)内容的分類――各論文はさほど単純な叙述をしているわけではない。しかし、かなり割切って、おおよその主題によって、分類を施したいと思う。その結果、どういう方法がどの時代に分布するかが明らかになるはずである。番号は、前(ニ)項において人名に付したもので、論文であることを表す。分類に妥当するものを、時代と番号で記入する。

A総論的……(イ)古人の文字意識（中世43。）、(ロ)現代の文字論的観察（中古37。38。、近代57。）

B文字……①文字の義の面から、(イ)訓詁（上代1 2 3 4 9 17。、中古20 29。32。、近代58 59。60 61。62）、(ロ)訓み添え（上代4）、(ハ)漢字と訓との対応（中古28 36。）

②文字の形の面から（中世46。）。

C運用……①文字選択、(イ)書分け・訓み分け（上代6 7 8、中古21、近世51。）、(ロ)場面〔晴と褻〕差（上代11。）、(ハ)時代差（上代14 15。）、(ニ)個人差（上代13、中世39 40。）、(ホ)ジャンル〔会話文と地の文〕差（中古18。）、(ヘ)文体〔和文仮名文学系と漢文訓読系〕差（中古34。）。

②表記法、(イ)文字の位置（中古21。）、(ロ)文字の大小（中古22。）、(ハ)発音のゆれに応じて（中古27。）、(ニ)通用・誤用・宛字（中古30、中世50。）、(ホ)必ず訓読させるために見せかけの漢語を使う（中古31。）、(ヘ)平がなの用字（中世47。）、(ト)片かなの用字（近世54。）。

③仮名遣（中古34、中世41 48、近世53。）。

④字音仮名遣（中世49。）。

⑤辞書の扱い方（中世45。）。

⑥文字生活（近世55。）。

⑦翻訳と漢字語（近代56）。

D書写……異同を通じて祖形溯原のこと（上代10・12、中古19・23、中世42・44）。

以上、論文の主題によって分類してみたところ、次のようなことが言えようかと思う。

Bの①の(イ)の「訓詁」は、要するに「漢字」（上代では「仮名」に対する「正訓字」をさし、中古以降では「片かな・平がな」に対する「漢字」をさす）を、どう訓めばよいかという研究である。これはほぼ各時代を通じて問題にされていることが分る。

Cの「運用」は、文字や符号をどう使い、どう書き記しているか、ということの研究として一括し、分類したものである。そのうち、①の文字選択では、上代に論文が集中し、②の表記法では中古に論文が集中し、③以下は中古以降の問題になっていると言えよう。これは、文字史的にまた表記史的にそう展開してきたのだから、研究もその線に沿っているものと思われる。

Dの「書写」の項目は、勿論、関係論文が上代から中世まで六篇も出たから設けたと言えばそれまでであるが、文字・表記論的には極めて重要な分野だと考えるから立てたのである。その前に断っておくが、例えば12の場合は『万葉集』とて「上代」の時代に入れておいた。ところが書写年代から言えば「中古」以降である。しかし、その論文が写本の異同を通じて、原本成立当時の祖形を考えようとしているのであるから、「上代」に入れるのがふさわしいとしてそうしたのである。さて、右に「重要」と言ったのは、原本がほとんど湮滅した今日、写本による原本想定の方法しかないのであるから、もっともっとこの分野の学問的研究法が確立されなければならないと考えるからである。明治以後の文献学がそれをしてきたのだ、何を今さらと言うかも知れないが、真の「高次本文批判」の方法が確立しているとも思えないのである。早い話が、音韻的にも文法的にもどちらでも文意通ずるという場合の処置が最も厄介なのである。誰かが「意改」しているのである。否、その中間が欠落しているために、我々には「意改」としか映らないのかも知れない。一方定家のように、はっきり意識して自らの方法で書写するということが行われると、まさにそれは定家の文字表記なのであるから、これについては研究者の自覚はある。要はそれ以外の「書写」においてまだまだ深く研究されねばならぬものが残されていることを、このDの諸論文は示しているのである。

以上、A～Dにおいて、数字化した諸論文のうち、数字の右に○印を付したのがある。これは、今後の研究上の指標となるべき価値をもつもの、従来の研究を克服しはるかに擢んでた説をなしたもの、また従来研究が手薄であった分野に対し、開拓または深化の成果を挙げたものと、私が考えたものである。それらは一五篇である。次にそれらの論文名・誌名を記し、その二、三を細説する。

三、細説の二、三

A(イ)中世43峰岸明「『字鏡集』白河本の和訓に加えられた『正』注記の字義について」（『訓点語と訓点資料』64、昭55・10）、(ロ)中古37山田忠雄「認識論的文字論――和泉往来のばあひ――」（土井先生・『国語史への道上』三省堂、昭56・6）・38遠藤嘉基『和泉往来・高野山西南院蔵』（京都大学国語国文学資料叢書二十八、臨川書店、昭56・12）・近代57山田俊雄「文字論に課せられた問題」（『国語学』

120、昭55・3）。

B①(イ)上代3小林芳規「漢文の古訓点から観た古事記の訓読(下)——本文の訓み方——」（『文学』50—1、昭57・1）・9小島憲之「『古事記』周辺」（『文学』48—5、昭56・6）・17尾崎和光「飛鳥京跡出土木簡の『皷十口』の解読について」（『訓点語と訓点資料』66、昭56・11）・中古29峰岸明「記録語文における漢字表記語の解読方法について——『自筆御堂関白記』を例として——」（馬淵和夫博士・『国語学論集』大修館、昭56・7）・32三保忠夫「古文書・古往来における『請』について」（『鎌倉時代語研究』4、武蔵野書院、昭56・5）・近代59小島憲之「出遊する鷗外——日乗類を中心として——」（『国語国文』50—10、昭56・10）・61佐藤喜代治「漢字字訓の研究・序説」（フェリス女学院大学『紀要』16、昭56・3）。

C①(イ)近世51山田俊雄「雑俳書の表記を資料として考えられることの一例」（『国語学』123、昭55・12）。

②(ロ)中古22北川和秀「続紀宣命の大字小字について」（『国語学』124、昭56・3）、(ハ)中古27工藤力男「古代文献における固有名詞の変容」（岐阜大学教育学部『研究報告』29、昭56・2）。

⑤中世45安田章「辞書の復権」（『国語国文』50—6、昭56・6）。

⑦近代56松井利男「『簡単』『明確』の周辺」（『国語国文』50—5、昭56・5）。

D上代12木下正俊「万葉集写本の意改」（『文学』48—2、昭55・2）・中古23曽田文雄「『十六そをかみにくとをあけて』攷」（『訓点語と訓点資料』64、昭55・10）・中世44小松英雄「蜷という貝——漢字表記を音声化すべきでない場合——」（馬淵・『国語学論集』）。

右一五篇の中、私の関心によって、さらに二、三を選ぶ。B①(イ)上代3小林芳規氏の研究。氏には近年『古事記』の文字・訓読についての矢継早やの発表があった。長年月の岩波思想大系1『古事記』（昭57・2）成立過程での業績である。「心前」（記上）を、『記伝』以降ムナサキと訓んで怪しまなかったのを、氏がココロサキと改訓したのは記憶に新しい。『記』が「心」と「胸」とを書分けていることが第一、それに鳩尾（みぞおち）を意味するココロサキの語が、石山寺本金剛波若経集験記平安初期点「胸前」や東寺観智院不空羂索神呪経平安中期点「心胸」の訓に見えることが第二である。また『古事記』の訓読が漢文訓読の方法によって検証するという特色もある。読者はその証言によって安堵することと思う。ただ、根本的な問題は、安萬侶がこう訓んでほしいと考えてのこととしての文字表記を我々が追体験する過程での「訓読」だということである。すると、「沿（をきむ）」と「知（しらす）」とは書分けているとすべきだし、「石」をイハと訓むという訓注の「下此れに効へ」がどこまで有効なのか、ということはもう一度洗い直すべき、などといった興味ある問題を『記』はまだまだ残してくれているようである。

中古29の峰岸明氏の研究。氏は古記録の文章（漢字表記語）の解読の方法を、特に漢字によって覆われているそれらの漢字表記語の精確な語形の再現において見出そうとし、理論と実際について述べた意欲的な論考である。まず、当該漢字表記がどのような過程でどのように表記されるに至ったかを知る必要を説き、漢字と訓との対応を検証し、次に解説の方法として、(イ)漢字表記語の職能の検討、(ロ)漢字表記語の語義の検討、(ハ)和訓確定の結果得られた、その語の存在を同時代の文献によって検証する、の三条を挙げ、それの実践

を『自筆本御堂関白記』においてなし、次に〈音読〉の問題につき、「漢字表記語について、その表記に供された漢字がその字義・用法に相応の定訓で訓読できない場合には、その漢字表記語は、字音語の可能性がある」との仮説を導く。徹底的に古文書を訓むという以上は、氏の如き方法が繰返し行われる必要を認めるべきだと思う。その客観性はやはり当時の辞書をあてがうことによって得られるのであろう。同氏のA(イ)中世43の『二十巻本字鏡集』白河本の「正」字の注記についての研究やC⑤中世45安田章氏の「辞書の復権」などの論文がそれを示している。そして一方では、まれにかあるいは少しはあるか見方によっては異なろうが、音声化する前に視覚的に表明しようとして表記された漢字があるということも忘れてはならない（D中世44小松英雄氏）。

D上代12木下正俊氏の研究。「天雲近光而警神之見者恐不見者悲毛」（巻七・一三六九）の「光」が、元暦本に「天雲近光而（走イ）（ハシリテ）、あまくものちかくひかりて（赭）（ヒカリテ）」とあり、西陽矢京「光而（ハシリテ）、走両本、六―本同」とあり、神田本に「走、ハシリテ」とあり、類聚古集に「光（はてりて）」とあるのに着目して、「走」を単なる誤字とは言えない、あるいは片仮名傍訓の二条院御本（六条本）や神田本が、一部にはあった「ハシリテ」の訓に合わせて本文も「走」に改めたのではないかと述べ、訓から逆にもとの文字を想定する方法が残されていることを豊富な例によって説く。新増補版『校本万葉集』（岩波書店）の編者としてのメモと氏は言うが、まさに名人業（わざ）と言えよう。とは言え、文字・表記の研究は幾度か原点に、あるいは振出しに戻る必要のあることを示唆しているように思えた。

――皇学館大学教授――